

或本、藤原京より寧楽宮に遷る時の歌

七九番

大君おほきみの命みことかしこみにきびにし 家いへを置おきこ
 もりくの泊瀬はつせの川かはに舟ふね浮うけて 我わが行ゆく川かはの
 川隈かはくまの八十隈やそくまおちず 万よろたびかへり見みしつ
 つ玉梓たまほこの道みち行き暮くらし あをによし 奈良ならの
 京みやこの佐保川さほがはにい行きゆき至いたりて 我わが寝ねたる
 衣ころもの上うへゆ 朝あさ月づ夜よ さやかに見みれば たへのほに
 夜よるの霜しも降ふり 石床いはとこと 川かはの氷ひ凝こり 寒さむき夜よを 息やす
 むことなく 通かよひつつ 作つくれる宮みやに 千代ちよまでに
 いませ大君おほきみよ 我われも通かよはむ

反歌

八〇番

あをによし 奈良ならの宮みやには 万代よろづよに 我われも通かよはむ
 忘わすると思おもふな